

氏 名	しま 谷 けん 島 谷 謙
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 503 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	ナチスと闘った劇作家たち ——もうひとつのドイツ文学

論文調査委員	(主 査) 教 授 西 村 雅 樹	助教授 松 村 朋 彦	教 授 杉 本 淑 彦
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、二十世紀ドイツにおいて最も過酷な時代、すなわちナチス政権時代（1933～1945年）の五人の亡命劇作家（フェルディナント・ブルックナー、フリードリヒ・ヴォルフ、ゲオルク・カイザー、フランツ・ヴェルフェル、ギュンター・ヴァイゼンボルン）の生の軌跡と作品世界を解明している。二千年以上の歴史を持つ最も民衆的な芸術である演劇が、二十世紀ドイツ最大の難問であるナチズムやユダヤ人問題をどのように表現し表象したのかということが考察されており、ナチズム時代の諸問題をめぐる演劇の造形力と芸術的可能性も追求されている。

ナチス政権成立後、焚書やユダヤ人ボイコットに象徴されるように、社会的、精神的な次元において統制と排除が押し進められ、多くの作家や芸術家は活動する場所と自由を奪われ、生まれ育った社会を追われた。亡命作家は祖国への帰還を夢見ながら異国をさまよいつつ続けた二十世紀ドイツのオデュッセウスである。彼らは逆境の中で創造性を発揮し、多彩な劇作品を生み出した。作品は時代の動きを映し取りながら、芸術としての深い魅力を備えている。作品の一見私的な場面にも世界的状況が影を落としている。作品には大戦間に生きた人間の葛藤や悲劇が彫り深く形象化されている。

本論文では、ユダヤ人迫害、亡命、抵抗運動、歴史意識、運命観など亡命作家が対峙した主要なテーマを扱った作品が取り上げられ、作品世界の内実が時代背景と関連付けて考察されている。各作品には、史実の重みを湛え時代空間を視覚化する想像力の在りようが窺える。取り上げられた十二の戯曲のうち翻訳があるのは一作のみである。論じる際にできるだけ同一主題の下に二作品ずつ束ね、重層的に主題の幅を捉える努力がなされている。

第一章「亡命文学論序説」では、最初に亡命の歴史が辿られ、亡命体験の特性が分析されている。ハンナ・アーレントの『全体主義の起源』等が言及され、亡命者の無権利状態が確認されている。次に、ナチス政権時代における亡命文学の実態ならびに国内亡命者の事例が考察されている。ナチス政権は焚書を敢行し、様々な領域の学問やモダニズム芸術・文学を攻撃し排除した。「歴史上、一国民が数ヶ月のうちにこれほど多くの代表作家を失った例はない」というクラウス・マンの指摘通り、一九三〇年代のドイツ文学では、作家や知識人の大移動をもたらした亡命体験が決定的な影響を及ぼした。

祖国を追われた作家達の運命を追い、彼らの苦悩や喪失感を読み取ることで、人間にとってかけがえのないもの、最も価値あるものが捉えようとされている。シュテファン・ツヴァイクはじめ亡命作家の多くの手紙や記録を通じて、苦難の内実も解明されている。彼らは人々に読まれるあてのない状況下で書き続けた。収容所や亡命の途上で、個々の体験がどれほど孤独で実存的でも、ひとたび言葉として表現されるならば、それは共有され普遍化される。そうした願いを込めて、彼らは苦難や思いを言葉に刻み込んだ。

亡命作家の生涯と作品は異国にあって決定的に変容した。過酷な時代を生き抜こうとする意志が作品を書く意志と一体化した点に、この時代の作家の真骨頂がある。受難と情熱の二重のパッションが彼らを突き動かした。彼らは紙に向かう時だけ自由だった。彼らの作品は、暗澹とした時代における精神の自己確認であり、生の証しである。

本第一章では、特に詩人マックス・ヘルマン・ナイセの未邦訳の詩が複数訳出され、亡命者の孤独と郷愁、再追放の不安や異郷で生を終えることへの諦念などが捉えられている。異国に生きる詩人にとって、言葉は過去の記憶を伝え、生を支え

る唯一の拠り所となった。詩人の作品のうちにそうした側面を読み取る試みがなされている。

また、異言語の壁に直面し、異文化のはざまで格闘しながら受難を積極的に克服しようとしたハインリヒ・マンやリオン・フォイトヴァンガー等の試みが取り上げられ、フランツ・ヴェルフの国家主義を超えた新たなヨーロッパ共同体構想への言及が見られる。トーマス・マンとハンナ・アーレントの反ナチス活動が意義づけられ、エルンスト・ブロッホのマージナル・マンとしての認識が、サイド等に言及しつつ評価されている。

第二章以下では各劇作家の戯曲が考察されている。本論文で扱われている五人の劇作家の大半は青春時代に第一次世界大戦に遭遇した「失われた世代」であり、戦後、表現主義演劇の担い手として活躍した。彼らの亡命後、追い討ちをかけるようにして第二次世界大戦が起きた。彼らがそうした時代状況下で執筆した作品の内実が考察される。

第二章「ユダヤ人迫害（一）」ではオーストリア出身の劇作家フェルディナント・ブルックナーの戯曲『人種』が取り上げられている。『人種』（1933年）はナチスのユダヤ人迫害を最初期に文学的主題として取り上げた、時代の記念碑的作品である。この作品では、1933年4月1日のユダヤ人ボイコットを背景に、引き裂かれるユダヤ系女性と非ユダヤ系男性の恋人達の悲劇が描かれる。ナチスへの抵抗と出国をめぐりユダヤ系女性と工場経営者である父親との間に生じた意見の対立が捉えられている。史実としてのナチス政権内における政策対立にも言及され、この作品が後年の本格的なユダヤ人迫害を先取りした点が捉えられている。ユダヤ系女性のモデルとしてハンナ・アーレントの反ナチス活動も取り上げられている。ユダヤ人の受難だけでなく、非ユダヤ系中間市民層の葛藤が描かれ、ドイツ社会が直面した亀裂が描かれている点が解明されている。

第三章「ユダヤ人迫害（二）」ではフリードリヒ・ヴォルフの戯曲『マムロック教授』（1933年）が論じられている。『マムロック教授』は、『人種』と同じくユダヤ人迫害が主題として取り上げられ、ブルックナーのものと同時期に同じ亡命先のフランスで書かれた作品である。1933年4月7日の職業官吏再建法によるユダヤ人解雇を背景に、主人公のユダヤ人医師が解雇に反発し、抗議の自殺にいたる。彼がヴァイマル憲法で保障された人権を盾にナチスに抵抗し挫折することで、作品の悲劇性が高まる点が分析されている。ユダヤ人差別に從來関与していなかった非ユダヤ系の同僚医師達がナチスの指示に従う姿を描き、ドイツ市民社会の限界と破綻を示している点が明らかにされている。前章の『人種』との共通点にも言及され、本来非政治的人間だった両作品の主人公が政治に巻き込まれていく過程が捉えられている。

第四章「日本の悲劇」では、表現主義演劇の双璧をなす劇作家ゲオルク・カイザーの戯曲『兵士タナカ』（1940年）が取り上げられている。カイザーの作品は戦後初のノーベル文学賞候補となるなど質量ともにブレヒトに比肩する。特に『兵士タナカ』は日本を舞台とし、日本人兵士と家族の悲劇を描いた点で、日本人にとってもきわめて重要な作品である。スイスで初演直後、日本公使館の抗議を受けて上演中止となった。貧農の息子タナカは兵士となり、妓楼を訪れ、妹に出会う。妹を渡すよう命じる客の伍長と妹を殺害し、軍法会議にかけられ処刑される。本章では日本の農村、軍隊、妓楼の三つの世界を横断する作品の構成や軍法会議でのやりとりが分析されている。戦前の日本文学において農村の疲弊や娘の身売り、軍法会議の実態等を正面から取り上げた作品が稀であることを踏まえて、本作品が意義づけられている。背景として田中正造や幸徳秋水をめぐる史実にも言及され、ゲオルク・ビューヒナーの『ヴォイツェク』と対比されている。また日独双方のファシズム批判も読み取られている。

第五章「亡命の道行き」ではオーストリア文学の異才フランツ・ヴェルフの戯曲『ヤコボフスキと大佐』（1943年）が扱われている。ヴェルフはフランスからピレネー山脈を越えて亡命した。その体験をもとに書かれた作品が分析され、亡命体験の内実と作品化の過程が捉えられている。作者同様、作品のユダヤ系の主人公はナチスの追及から逃れきれずに死を覚悟する。本章では、階層の異なる亡命者同士の確執や他国人との関係が分析されている。作者は時代空間を舞台化しながら、生き延びる道を模索した。作品の主人公は幾つもの岐路に直面し、観客も否応なく状況判断を迫られる。作品に描かれた限界状態で、赤裸々な人間性が示される。さらにさまよえるユダヤ人と聖フランチェスコが登場することで、作品に神話的奥行きと寓話的色調が付与される点も指摘されている。同じく亡命を描いたアンナ・ゼーガースの『トランジット』やレマルクの『リスボンに死す』とも比較され、共通点が捉えられている。

第六章「抵抗運動」では、抵抗運動に関する戯曲としてギュンター・ヴァイゼンボレンの『非合法者たち』（1945年）とヴォルフの『愛国者たち』（1942年）が取り上げられている。両作品にはドイツ国内と占領下の国で抵抗者が置かれた状況

の違いが反映されている。ヴァイゼンボルンが参加したドイツにおける反ナチス抵抗運動は非合法化され、自国の敗戦を目指す悲惨な闘いだった。『非合法者たち』には、抵抗運動の参加者が逮捕され家族と永遠の別れを告げる姿が刻印されている。この作品が同じく抵抗運動を扱ったヴェステン『ベシー・ボッシュ』(1936年)と対比されている。そして抵抗運動の史実が取り上げられ、戦後も東西ドイツ対立の中で正当に評価されなかった点が示されている。他方、フランスにおける抵抗運動には国民的基盤があった点が、鉄道スト等の史実から明らかにされている。また戦後いち早く起きた歴史修正主義の動きに対するヴァイゼンボルンの批判への言及が見られる。さらに異化効果や叙事的演劇などの劇作法をめぐる第二次世界大戦後のヴォルフとブレヒトの討論が検証され、ブレヒト演劇を再考する上で新たな視点が得られている。最後に、作者ヴォルフがソ連亡命時代および戦後の東独において検閲制度に苦悩する姿が捉えられている。

第七章「歴史的想像力」では亡命作家の歴史劇が扱われている。彼らは相次いでナポレオンを取り上げ、ヒトラーとの対比を試み、自らの時代を歴史的に把握しようとした。ブルックナーの戯曲『英雄的喜劇』(1942年)で、彼は、ナポレオンに国を追われた作家スタール夫人を通して、独裁者と対峙する精神のあり方を探った。夫人がナポレオン軍より先にロシアを訪れ、ナポレオンへの徹底抗戦を促し、祖国フランスの人々に敵視され孤立感を深める姿や作家コンスタンとの関わりなどが史実との関連性をふくめ解明されている。カイザーは『ニューオーリンズのナポレオン』(1941年)で、ナポレオンが終焉の地セントヘレナ島から脱出した伝説をもとに好戦的人間を諷刺する戯曲を書いた。本章では、フォイヒトヴァンガーやデーブリン、ルカーチの歴史文学論も言及され、歴史劇が時代の展望と打開の糸口を見出すために過去と取り組んだ成果であることが検証されている。

第八章「運命をめぐるドラマ」では、カイザーの戯曲『メデューサの筏』(1943年)と『オルゴール』(同年)が取り上げられている。前者では大戦中に旅客船がドイツ軍のUボートに撃沈された史実に基づき、救命ボートで漂流する子供達の葛藤が描かれ、後者では戦死したはずの夫が再婚した妻の許に帰還する悲劇が描かれている。自ら死を選び取る両作品の主人公の姿から、亡命時代の作者の運命観が捉えられている。両作品には、亡命時代に希望と幻滅の間を揺れ動いた作家の精神の在りようが色濃く投影されていることが究明されている。

第九章「ゲオルク・カイザー」では、生涯に約六十作の戯曲を書き、表現主義演劇を代表する劇作家の生涯が辿られ、亡命前と亡命後の認識の変化と作品の変容が捉えられている。彼はナチス政権下ドイツで執筆を禁止されながら五年間留まった後、身の危険を感じてスイスへ亡命し、渡米の希望を叶えられることなく終戦直後に当地で亡くなった。本章では、亡命時代の生活の実態や、ナチス政権下とスイス亡命後の監視体験によって受難意識が深まり、作品に受難意識が投影される過程が解明されている。

第十章「第三帝国時代の亡命」では、亡命文学の時代的背景を明らかにするために、各国で亡命作家が置かれた状況が示されている。ユダヤ人が亡命をためらった理由やナチスの亡命者政策が分析され、亡命先の各国の実態から亡命者の様々な苦悩と悲劇が読み取られている。ドイツ軍の西欧各国への侵攻によって再亡命する事例や、英米の受け入れ制限と研究者の優先受け入れ、ソ連で独ソ不可侵条約に翻弄された事例、中国や日本における亡命者の実態などが解明されている。そして子供の亡命の実態が捉えられ、両親と生き別れた子供の亡命体験を描いたウルマンやゼーバルトなどの作品が分析されている。

参考論文『ナチスと最初に闘った劇作家—エルンスト・トラーの生涯と作品』では、カイザーと並び表現主義演劇を代表するユダヤ系の劇作家エルンスト・トラーが取り上げられている。第九章「一九三〇年代のトラー」では、トラーの反ナチス活動の展開が彼の諸論考の分析を通じて考察されている。彼は1930年に『帝国首相ヒトラー』という一文でヒトラー政権成立をいち早く予言した。亡命後、トラーは『ゲッベルス氏への公開状』を発表し、反ナチス闘争宣言を行った。本章では他に『ドイツにおける平和主義の破綻』、『ドイツをめぐるわれわれの闘い』等の文章が考察され、彼が反ナチス抵抗運動に行き詰まり、危機感を深め、自殺する経緯が跡付けられている。第十章「亡命時代の演劇活動」では、戯曲『もう二度と平和は』(1936年)と『牧師ハル』(1938年)が考察されている。さらに彼の『演劇の機能』という演劇論も検討され、ブレヒトの教育劇『処置』と対比されている。『牧師ハル』では、ナチスに抵抗して処刑された牧師ボンヘッファーの生涯が先取りされている点が明らかにされている。第十一章「トラーとネルー」では、トラーとインド独立運動の闘士で初代首相となるネルーが反植民地会議で出会って以来の深い交流の過程が、往復書簡等を手がかりに解明されている。両者が繰り返し再

会し、スペイン内戦や日中戦争に関して意見交換し、インド会議派の対日政策等を決定した点とその意義が明らかにされている。

論文審査の結果の要旨

二十世紀のドイツにおいては、ナチス支配期に、ユダヤ系の作家やナチスと政治的に対立する作家など、多くの有力な文学者が亡命し、ナチスへの抵抗を試みた。これらの文学者やその文学作品については、反ナチス亡命文学研究としてすでに相当な研究成果が積み重ねられている。ただし対象として取り上げられる文学者や文学作品には偏りが見られ、多岐にわたる彼らの活動が全面的に解明されているとは言えない。このような研究状況を踏まえて、論者は、未だ十分には研究されていない五人の作家、フェルディナント・ブルックナー、フリードリヒ・ヴォルフ、ゲオルク・カイザー、フランツ・ヴェルフエル、ギュンター・ヴァイゼンボルンに取り組んだ。これらの作家に共通するのは、彼らがいずれも、当初表現主義的傾向を示した後、第一次世界大戦後の大戦間期にはドイツやオーストリアを代表する作家になったものの、ナチスによる政権掌握後は国外で活動せざるをえなくなったという点である。本論文では、これらの作家の文学活動のうち、ことに劇作に焦点が当てられ、演劇を通してのナチスとの闘いを解明することが目指されている。

全十章からなる本論文の第一章「亡命文学論序説」と最終章「第三帝国時代の亡命」では、亡命ならびに亡命文学一般が扱われている。第一章では、本邦初訳の詩の訳をはじめ数多くの亡命文学者の言葉が引用され、亡命体験の特性が分析され、亡命文学について考察が行われると共に、ナチスへの抵抗の実態が概観されている。最終章では、亡命の諸相が統計資料などにも基づいて明らかにされている。

第二章以降では、五人の亡命劇作家の作品が論じられている。まず作者の紹介があり、次いで作品のあらすじが述べられ、史実との対比が行われ、作品の世界への考察が展開され、最後に作品の反響が示されるという論の進め方が、いずれの章においてもほぼ一貫して見られる。

「ユダヤ人迫害」と題する二つの章では、ブルックナーの『人種』とヴォルフの『mamロック教授』が取り上げられている。ユダヤ人迫害を最初期に文学的主題として扱った記念碑的作品と位置づけされる『人種』、ならびに、従事する職業から解雇された医師を主人公とする『mamロック教授』の両作品において共に、ドイツ市民社会の限界が示されているという点が明らかにされている。「抵抗運動」と題された章では、ヴァイゼンボルンの『非合法者たち』とヴォルフの『愛国者たち』が取り上げられ、ドイツ国内と占領下の国とでは抵抗者が置かれていた状況が異なっていたことを主なテーマとして論が展開されている。「亡命の道行き」の章では、ヴェルフエルの『ヤコボフスキと大佐』が取り上げられ、ヴェルフエルの亡命体験の内実と作品化の過程が捉えられている。「歴史的想像力」と題する章では、ブルックナーの『英雄的喜劇』ならびにカイザーの『ニューオーリンズのナポレオン』が扱われている。これらの作品において両作家がナポレオンを取り上げ、ヒトラーとの対比を試み、自らの時代を過去の時代に照らして把握しようとしたことが明らかにされている。「運命をめぐるドラマ」の章では、カイザーの『メデューサの筏』と『オルゴール』が取り扱われている。大戦中に旅客船がドイツ軍のUボートに撃沈された史実に基づく『メデューサの筏』、および『オルゴール』のいずれにおいても、自ら死を選び取る主人公の姿から、論者は、亡命時期のカイザーの運命観を読み取っている。カイザーの『兵士タナカ』には、「日本の悲劇」と題する一章が割かれている。日本の軍隊制度や天皇制に関わるこの作品は、スイスでの初演直後、日本側の抗議を受けて上演中止となった。本章では、日本の農村、軍隊、妓楼の三つの世界を横断するこの作品の構成や軍法会議でのやりとりが鋭く分析されている。カイザーについては、さらに独立した一章が設けられ、亡命時期の彼の苦悩について論及がなされている。

なお、カイザーと同傾向の作家として並び称せられるエルンスト・トラーについては、参考論文として付された『ナチスと最初に闘った劇作家—エルンスト・トラーの生涯と作品』において、戯曲『もう二度と平和は』および『牧師ハル』、ならびに『ゲッベルス氏への公開状』等の文章についての優れた分析が見られる。

本論文で扱われた劇作家に関しては、これまで表現主義の時期の文学活動が主に研究されてきた。また、取り上げられた作品は、いずれも第二次世界大戦後にも刊行され一定の読者を獲得したものの、研究対象として論じられることはあまりなかった。そのような状況にあって、これらの作家の亡命時期の活動の実態を探り、創作の内実を究明した本論文は、現代ド

イツ文学の一面を新たに掘り起こしたものとして、意義あるものと認められる。また、反ナチスの立場を取る演劇として、これまではブレヒトの演劇が重視される傾向が強かった。このブレヒト劇とは異なる傾向の演劇が、反ナチスの亡命劇作家によって多数創作され上演されていたことが、本論文では明らかにされている。ドイツ国内の文学とは別に国外で展開された文学活動という意味合いの「もうひとつのドイツ文学」を副題とする本論文は、従来のものとは異なるもうひとつの亡命文学像も演劇に関して提示したものとして高く評価できる。

本論文では、取り扱われた作品について、そのテーマを全体として捉え、史実と照らし合わせるということに主眼が置かれているため、作品の細部にわたる分析は少なめである。作品によっては、具体的な引用と解釈がもう少しあれば、説得力がさらに増したとも感じられる。ただしこの点によって、本論文の価値が損なわれるわけではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2005年12月27日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。